



Member's Open Space



## 昭和初期の頃の浅草六区（その1）

●美唄歯科医師会会員  
雨田 実

先号で浅草について拙文を綴らせていただいたところ、六区（映画館、演芸館街）に関して、道歯会の先生から、なつかしい浅草について読んだ。六区と呼ぶからには一区、二区もあるものなりや？との、おたずねをいただいた。私のささやかな知識では、金竜山、浅草寺（俗に観音様）境内一帯を大正時代前から浅草公園と呼んでおり、それを六区画に分け、六区に映画館、演芸館等の小屋が出来たのは明治20年頃からであるという。それが六区という名だけ現在も残っている。ちなみに一区とは、観音様本堂、浅草神社（三社様）附近および仲見世の半分一帯を呼ぶそうであるが、今は殆ど使われていないそうである。イン語で、浅草をエンコと呼ぶのは、浅草公園の固有名詞を約した呼びかたである。（本道の一部の地域で排泄物の大のことを同じ発音で呼ぶ地域があるようで）これは余談として、お笑い下さい。

仲見世の突きあたりの観音様に手を合わせて左へひとすじ、六区の小屋街に通じる。香具師テキヤの稼ぎ場である広場（奥山）の左に、戦後なくなってしまったがひょうたん池と呼ばれた大池があって、その先が六の小屋街であった。

北側のつきあたりが、曲芸と浪花節と玉のりである有名なマストン江川の大盛館、南隣りに江戸館、キネマ倶楽部、花月劇場、遊楽館、寄席の方世館、喜劇の世界館と続き、洋画専門の封切館の大勝館、三友館、富士館、帝国館、初音館、大東京館、松竹座、日本館迄続き、道路をへだてて反対側に

金竜館、常盤座、東京クラブ、電気館、千代田館、オペラ館と続き道路をへだてて、ひょうたん池のため、映画館は片側だけ。つまり大勝館から江川劇場までで中程に花月劇場がありアキレタ・ボーイズの川田義雄、益田キートン（本道出身）等が旗揚げしたのは、昭和10年頃であったろうか？花月劇場は池の真前だから、そのネオンが池に映って何んともいえない美しさだったのを、今でも眼をとじれば、はっきりまぶたのうらによみがえらせることができる。昭和初期の頃の浅草を覚えている者にとって、これを抜きにしては浅草はないようなものである。

### 活動写真（活弁）の頃

トーキーのなかった無声映画の頃は、活動写真をやくして活動と皆がいていた。むろん白黒で画面もせまい。音が出ないからスクリーンの前が一段低くなっていて、オーケストラボックスといい、そこで洋楽器と和楽器とが合奏する。開演間近になると、楽士たちが次々に入ってくる。それは歌舞伎の幕開きの、カチという柀の音を聞くのと同じような、なんともいえない期待感を観客に与えるのであった。リーンと開演のベルが鳴って場内が暗くなると、舞台の片袖の小机に豆ランプが点いて台本を照らす。いよいよ無声映画の上映開始である。活動弁士がさっそうと現われる。観客から弁士に声がかかる。弁士では徳川夢声、古川緑波、山野一郎、生駒雷遊、国井紫紅、染井三

郎、井口<sup>せいはい</sup>静波などを覚えている。面白くてでたらめなのは大勝館の大辻司郎で、西洋もの専門だった。頭の Teppen から独特の声を出して、女性は誰でもメリーさん、主役の男性はジミーカロバート、ギャングはジャックと決まっていた。

「馬から落ちて落馬して赤い顔して赤面したのでありました」とか、「メリーはロバートの胸元に」とか、泥棒が出てくると「勝手知ったる他所の家」なんていいかげんでも、それが受けて<sup>うけもの</sup>看板だった。停電で場内が真暗になってしまい、もちろん映画もストップ。そのまま続けば、大きわざになる。まして浅草の観客である。この時大辻少しも騒がず「しばらくお待ちくださいませ、もう電気は上野まで参っております。この浅草まですぐにまいります」とすましたもので、拍手をあげるのだからたいした受けかただった。活弁は写真の種類別で時代劇・現代劇・洋画・邦画あるいは悲劇・喜劇によって、それぞれ得手、不得手があって、お客は役者に対するひいきはもちろんだが、特定の弁士に対する熱心なファンも多く、活動小屋への好き嫌いもかなりのものだった。しかし浅草のお客さんのほとんどが、映画監督というものを意識していなかったようであった。活弁はなやかなりし頃のフィルムは短いものが多かった。長いものは続きものになっていて、手に汗を握るようないい所で切れてしまい「いかにあいなりますか？お後は来週のお楽しみ」となる。前後編ではなく、勝手に何回にも分けて上映するのである。それでも、お客は怒りもしないで続きを見に行くのであった。無声映画の代表的役者は、何といても眼玉の松ちゃん（尾上松之助）であった。自来也や荒木又右衛門を楽しみにチャンバラを見に行ったものである。これに続いて阿部九州男、羅門光三郎、坂東妻三郎などを良く見た。林長二郎、後の長谷川一夫は林長、坂東妻三郎は坂妻、嵐寛寿郎は嵐寛と呼んだ。片岡千恵蔵、市川右太衛門、大河内伝次郎、月形竜之介なども登場していた。女

優では酒井米子、鈴木澄子、琴糸路など、現代劇では栗島すみ子、川崎弘子、森律子である。上山草人、高田稔、鈴木伝明等がいた。西洋物では西洋チャンバというべき、ジゴマや三銃士等のダグラス・フェアバンクス、トム・ミックスが好きだった。女優ではマレーネ・デートリッヒ、グレッタ・ガルボ、リリアン・ハーベ、ダンネル・ダリユーなどを覚えている。喜劇では、自分は絶対に笑わないバスターキートン。ドタバタ時代のチャップリンなどが人気の中心であった。マルクス五人兄弟のインチキ商売というのがインチキという言葉の使われ始めではないかと思う。一幕終わって明るくなる幕間には肩から帯をかけて前に盤台を持った売り子が「エー、オセンにキャラメル、エー、アイス」と独特の声で寄席の間を売り歩いた。私はラムネを良く買ったが、あんなにうまくアツという間になくなってしまう、はかない飲みものは他にない。まことに庶民的な味であった、と今でも思っている。次号では浅草オペラについて綴ってみる予定です。乞うご期待!!

